「アルツハイマー病研究の最前線」

アルツハイマー病は認知症のなかで約6割を占める疾患とされていますが、いまもまだ予防や治療の方法が確立されていません。高齢者の数が増えていくなかで、同疾患をはじめとする認知症の患者数も、また社会的な負担も増加しており、発症メカニズムの解明や予防・治療法の開発は社会における急務となっています。

2018年9月19日、千里ライフサイエンスセンター・ビル山村雄一記念ライフホールで開催された本セミナーでは、アルツハイマー病を研究する6人の講演者を迎え、この疾患の克服に向けた新しい戦略を多面的に紹介していただきました。各講演では研究最前線の状況が披露され、研究に挑むことの意義をあらためて認識する機会になりました。

アミロイドβペプチド、タウタンパク質……
病気の原因物質に迫る

はじめに、コーディネーターの一人である理化学研究所の西道隆臣氏が、日本における研究の課題を触れ、適切な研究領域の評価をすべきと提案しました。

午前の講演では、まず東北大学の荒井啓行氏が登壇し、認知症研究の現状や課題を概説しました。アミロイドβペプチド（Aβ）とタウタンパク質（タウ）の発見を例に、神経病理所見の解明から認知症への理解が進んだことを述べるとともに、有病率が上昇している現状も紹介しました。アルツハイマー病の発症に至る過程として、Aβの発生、タウによる神経細胞死という段階を経ていくという説を紹介しました。2025年までにアルツハイマー病の疾患修飾薬が開発されることが世界的な目標とされているといった現状も伝えました。

もう一人のコーディネーター、大阪大学の森原剛史氏は、しきみが複雑であるといったアルツハイマー病の特徴や課題を挙げ、オミクス解析のアプローチで研究を進めていることを紹介しました。